



# オランダでの学会見聞記

随筆

岡田 弘 輔\*

本誌の編集委員の今中忠行教授からファクスが入って、随筆で8,000字を書けとの御下命である。実験結果の図表を含む論文でも原稿用紙20枚は大論文に属する。まして頭の中だけから8,000字をひねり出す作業は老人ボケ進行中の身には不可能と判断し、800字なら何とかなるが8,000字は無理と返事をした。短くてもよいとの事で、引受けさせられたが8,000字をいくら値切っても4,000字は義理がありそうで、本稿が冗長なのはそのせいである。

今中教授は東南アジア諸国との国際交流についてでもとの勸奨であるが、現在学術振興会で評価と将来計画が審議対象となっており、その委員を務めている関係で、結論が出るまで随筆的に書くのはいかにもまずい。

それで一人の停年教授の哀歎を現役時代との関係で綴ってみることにした。

## オランダでの国際会議出席にあらゆる 心理的抵抗を試みること

私が「キシランとキシラナーゼ」のシンポジウムのファスト・サーキュラーを見たのは7月中旬であった。キシラナーゼについて10年以上大阪大学で研究を続けて来た私達にとって、出席して今迄の成果を宣伝する必要があるという義務感が先行した。最初にキシラナーゼ遺伝子をクローン化（遺伝子工学の手法）し、キシラナーゼの立体構造を蛋白研の勝部教授のグループとの協同研究で成功させたという自負もある。サーキュラー中の招待講演者がECとアメリカのみで、日本を無視するのかという怒りも出席

への原動力として働いていた。

それにもかかわらず出席を逡巡させる理由も多々あった。第一にサーキュラーを受取った時点で講演申込みの期日が過ぎており、以降はポスター発表のみ受けるとのことである。まず講演させるなら出席する旨を7月中旬、プログラム委員に手紙を出し反応を見ることにする。難題を承知で、拒否されれば行かずにすまず算用である。OKの返事が来たのが10月中旬、手紙の日付けは8月5日、船便で2ヶ月以上かかって着いたことになる。

この後の不参加の理由は飛行機の前予約がとれない事だけなのだが、阪大の国際交流センターにお願いすると、SQ（シンガポール航空）でも、KLM（オランダ航空）でも空席があるとのことで、不参加の理由はすべてなくなった。

これ程迄、腰が重かった理由は、1) 現役時代程海外旅費が豊富ではないこと、2) 現役時代は参加費免除のみの招待でも自尊心を満足されれば喜んで参加したものだが、今回は全くの一般参加であること。（これが一番大きい因子だったが）。3) 現役の最後の年度は2回ヨーロッパへ行っている。1度はパリでの国際会議の序に、インターラーケンでの日・スイス二国間セミナーに参加して、アルプスのユングフラウに登った。もう1度はECの研究発表会に呼ばれてアテネへ行きアクロポリスを見学した。これらの旅費は向うもちであった。スペインもイタリアも行っていないが、これでヨーロッパは完了したと思っていたことである。

もう1つの理由は直前のスケジュールである。

12月4日	名古屋往復（講演会）
12月6日	大阪発 東京、日本学術振興会での会議出席、東京泊
12月7日	成田発 アムステルダム着 アムステルダム泊

\*Hirosuke OKADA

1927年3月30日生

昭和23年大阪大学工学部醸酵工学科卒業

現在、熊本工業大学応用微生物工学科、教授、工博、分子生物学

TEL 0738-29-2301, 096-326-3111

- 12月8日 アムステルダム発(汽車)ワーゲニンゲン着 夕方シンポジウム開  
会式
- 12月9日 シンポジウム
- 12月10日 シンポジウム(講演予定)
- 12月11日 正午迄シンポジウム, ワーゲニン  
ゲン発 アムステルダム泊
- 12月12日 アムステルダム発
- 12月13日 成田着 羽田経由 大阪着

この日程は子供に「死んで了うで」と警告されたものである。(本当に5ヶ月後に大手術を受けることになった。)

スケジュールで空いているのは8日の前半で、アムステルダム・ワーゲニンゲン間は汽車で約1時間半、夕食迄に会場に入ればよいので午後3時頃まで自由時間がある。美術館巡りの時間に当てることにする。

#### アムステルダムでレンブラントとゴッホ を見ること

ゴッホ美術館は最初から予定していた。市電を利用してゴッホ美術館へ行くと、日曜日の開館は正午からと云うことである。それではと云うので国立美術館へ廻る。丁度アムステルダム観光の目玉として、レンブラントの作品を世界中から集めて展観できると云うので、オランダ以外の国々からも多数見えていた。この美術館はもともと、レンブラントのコレクションで有名な美術館であり、この後展観はパリとロンドンへ移動するだけと云うので評判が高い。私は知らなかつただけ幸運であった。

レンブラントは1600年代の前半の画家で、徳川幕府の2・3代目頃、シェクスピアとも重なった時代である。光と影の画家として著名であるが、本質的には肖像画家(当時は収入のためには是非に関わらず必要であった)で、同じ手法を用いて宗教画(神話を題材とした)を画いている。神界と人間界を同じに画くことがそれ程難しかったのかなあと感心する。

会場で面白かったのは、ウォークマンを貸出していて、多分個々の絵の解説が入っていて、聞きながら一巡すると納得するという仕組みらしい。美術をオランダ語(英語)で解説されて

も判る筈もないので敬遠したが、日本では経験していないので興味があった。レンブラント展は期待していなかっただけ全くのもうけものであった。

正午の開館を待ってゴッホ美術館に入る。日本人のゴッホ好きと云われるが、ゴッホの浮世絵好きが日本人の屈折した自尊心をくすぐる面もあるが、私の誕生日が3月30日でゴッホと同じであるというくだらない理由も加味されている。もっともゴッホ晩年の狂気と私が無関係ではないからかも知れない。

この美術館では、初期の暗い時期から晩年の(ゴッホの画家活動は10年位の短い期間であったが)狂気の明るさまで揃っている。その中に廣重の模写2点、ミレーの模写1点、レンブラントの模写1点が含まれている。模写と云ってもゴッホ式の描法ではあるが、オリジナルを全部見ているのですぐに判る。その中の廣重の模写の枠に「江戸町一丁目錦木」の日本語があり、その出所については、先日テレビで追跡があり、別の浮世絵、錦木の花魁絵から写したものであるとの証言があった。オランダにはもう1つ有名なゴッホのコレクションがあるが、今回は断念した。アムステルダムに糸杉の絵が1点もないのは不思議であった。また「日まわり」の絵を日本に買われたことを残念がっているオランダ人には沢山会った。

#### シンポジウムでキシラナーゼの立体構造が 独り歩きしていること。

会場のあるワーゲニンゲンは旅行案内書にはないし、地図でも詳しいものでないのっていない田舎町であるが、農業大学があり、発展途上国のための国際交流センターがある。その宿舎に泊ることになる。部屋にはバスがなくシャワーだけである。

同じ思いを北京でしたことがある。日・中のバイオテクノロジー・シンポジウムを北京で持ったことがあるが、郊外の臥佛寺が宿舎になった。臥佛寺は唐末の創建、元代の再建で、多分名僧が起居された僧坊が宿舎に当てられた。その宿坊が我々の宿泊に合せて突貫工事をしたらしく、掃除未了の状態であるのは兎も角、浴槽がなく、

湯を浴びるようにできている。唐代の清僧と同じ生活ができる名誉を体験できた。中国の御好意で冷房を各室に付けて頂いたのだが、大阪出発のグループだけの間はまだ良かったが、東京出発組が到着し、冷房を入れると電流過剰でトランスが焼けて、停電、1夜ローソクで明した。次の日から香山大飯店へ移って1,000年のタイムスリップを経験した。浴槽がないという連想だけで北京へ翻んだわけである。

シンポジウムの内容は専門にわたるので詳細は避けるが、内容はキシランの化学構造、キシラナーゼとキシラナーゼの応用の3部門に分かれている。キシランの化学構造と応用については疎遠だった分野だけに勉強になることが多かった。

キシランは農林産資源の20~30%を占め、地球上での生産量は年産額はでん粉が10億トンに較べて約200億トンあり、これが有効利用は将来の人類の食糧問題では重要な鍵である。ちなみにセルロースの年産額は500億トンである。農林産資源の利用と云う事で北ヨーロッパ諸国、カナダでの研究が特に盛んである。研究者の系列も2つあり、1つは応用を意識してキシラン・キシラナーゼの枠外へ出る必要のない人達（このシンポジウムの主流である）と、もう1つは分子生物屋でたまたまキシラナーゼを材料としている研究屋で私もその1人である。

いよいよキシラナーゼのセッションになって、最初の講演者 Biely 教授が「お前のデーターを使わせて貰うよ」と云うので「どうぞ」と答えたのだが、講演内容の半分は私達のデーターである。その上立体構造のスライド迄でてきて、これでは私の喋ることは殆んどなくなってしまった。隣の女性の参加者は「お前の講演までにあのスライドは5回は出てくるよ」と云われて覚悟を決めた。スライドは神戸での蛋白質工学シンポジウムのプロシーディングから採ったものであるが、そこで発表した内容は全部講演されている。著者の知らぬうちにデーターだけが独

り歩きしているわけである。研究者妙利に盡きる話であるが、これでは自分の講演を用意してきたものから変更せざるを得ない。結局自分の講演前に問題のスライドは4回出て来た。キシラナーゼの立体構造が解析されているのは私達の結果しかなく、触媒機構に触れるとどうしても立体構造を引用するより仕方がないからである。

自分の講演は結論を引出した研究経過の説明と、セルラーゼの立体構造の類似性に主眼をおくことにした。講演はいつもの東南アジア向けの英語で文法無視、しかし結論は周知なので理解はして頂けたらしい。後半のセルラーゼの立体構造は海外初公演なので受入れられたようである。

閉会式で組織委員長の Voragen 教授がスライド3枚を使って今回の成果を総括したのだが、そのうち1枚はキシラナーゼの立体構造であった。

## おわりに

考えて見るとワーゲニンゲンで講演した内容は全部大阪大学時代の成果である。停年後の成果は何も付加されていない。つまり、もしデーターが独り歩きしている名誉を受けるとすれば大阪大学のグループであるべきである。地方の私立大学と大阪大学では落差は大きい。大阪大学での過去の栄光にしがみ付いて、その栄光が時効になるまで残光の中でよい思いをさせて頂くことにする。

新しい大学でよい仕事ができるようになるとその名誉は受ける資格があるかも知れないが、過去の栄光は私が作ったものでなく、大阪大学での同僚達に属することを痛感している。

これがある停年教授の哀歎である。

これで大体3頁分あると思う。本当に書きたかった事は最後のおわりにの項であるが、その前は冗長部分である。